

もくぞう あ み だ によらいりゅうぞう
木造阿弥陀如来立像

<概要>

員数	1 軀
法量	像高 98.1cm
時代	鎌倉時代（13 世紀）

本像は専長寺本堂の本尊・阿弥陀如来坐像に向かつて左の脇壇上に安置される三尺阿弥陀如来立像で、吉良町 駿馬にあった東林寺の旧仏と伝えられる。理知的で端嚴な面相、写実味と絵画性を併せもつ清雅な衣文の「安阿弥様¹」を示す像である。裙²・覆肩衣³・衲衣⁴からなる着衣は、右胸前で覆肩衣の「弛み裏」をつくって衲衣にたくし込み、左胸で下層衣を衲衣上に引き出してやや弛ませる。この両胸前に衣の弛みをあらかず着衣法は、仏師快慶の最晩年期の作例にみえることが知られている。ただし、本像の下顎中央に1カ所、後頭部中央2カ所には錐点⁵が認められ、面相や衣文にやや単調さもうかがえるところから、快慶に極めて近い作者による快慶新旧作を規範としての造像である可能性も考えられる。

近年、東海地方においても新たに見出されつつある鎌倉時代13世紀の安阿弥様仏像のなかでも、本像は比較的早期の優作であるとともに、快慶とその系譜にある工房の活動範囲、足利（吉良）家との関りなどについて考えるうえでも重要な資料である。その学術的な価値は高く、県指定文化財にふさわしいと考えられる。

-
- 1 鎌倉時代の仏師快慶の作風に影響を受けた仏像の様式。快慶の法号である安阿弥陀仏にちなんで称した呼称。
 - 2 僧侶がつける黒色でひだのある、腰にまとうもの。
 - 3 僧の衣の1つ。袈裟の下に着る腋をおおう長方形の衣。袈裟が汗などでよごれるのを防ぐ。肩にかけ、両端で左右の腋や胸・乳をおおって着る。
 - 4 人が捨てたぼろを縫って作った袈裟のこと。古くは、これを着ることを修行の1つとしたが、中国に至って華美となり、日本では綾・錦・金襴などを用いた袈裟をいう。
 - 5 錐による指標点。



木造阿弥陀如来立像（愛知県提供）